

(様式第1号)

平成27年度第2回文化振興審議会 会議録

日 時	平成27年8月24日(月) 19:00 ~ 21:00
場 所	市役所北館2階第3会議室
出席者	会 長 中川 幾郎 副 会 長 根本 敏行 委 員 藤野 一夫 委 員 弘本 由香里 委 員 木ノ下 智恵子 委 員 柴田 愛 委 員 山西 康司 委 員 田中 隆子 委 員 姉川 昌雄 委 員 中村 尚代
欠 席 者	なし
事 務 局	米原企画部長, 奥村政策推進課長, 御宿政策推進課主査, 松原
会議の公開	■ 公 開
傍 聴 者 数	0 人

1 会議次第

- (1) 開会
- (2) 議題1 第2次芦屋市文化振興基本計画策定にかかる市民アンケートについて
- (3) その他

2 提出資料

資料1 平成27年度 第2回文化審議会資料

資料① 芦屋市文化振興基本計画策定に向けた地域特性を各種計画や統計資料等から整理(イメージ)

資料②-1 芦屋市文化振興基本計画策定に向けた現状・問題と課題の整理(イメージ)

資料②-2 芦屋市の文化を見つけよう・見つめよう

### 3 審議経過

#### (1) 開会

**中川会長：**皆さんこんばんは。それでは、今から第2回の芦屋市文化振興審議会を開催いたします。今日は議題が一つだけあります。第2回芦屋市文化振興審議会における市民アンケートについてですが、資料の説明の後、会議に入りたいと思うので、よろしく願いいたします。

#### (2) 議題1 第2次芦屋市文化振興基本計画策定にかかる市民アンケートについて

**御宿主査：**それでは平成27年度芦屋市文化振興審議会という資料に基づいて説明させていただきます。

まず、今年度の文化振興の取組の目的ということで、おさらいをします。平成27年度の事業目的について、平成28年度に新たな文化振興基本計画を策定することになっていきますので、それを踏まえた課題やニーズを把握するため市民に文化の意識調査を行うと位置付けています。

前回の第1回文化振興審議会でもいただきました主なご意見は、別紙1の資料にまとめています。平成26年度の文化事業に関してとりまとめたものをお配りしていますが、その評価報告書をもとにいただいたご意見を1ページ目に記載しています。評価報告書から見える現状と課題と文化振興審議会のご意見ということで、表形式で現状の課題と今後の進むべき方向を整理しました。

評価報告書では「課題を解決克服していくためにはこの事業をこう活用しようという課題設定が本当は必要だが、現在のところは課題設定ができていないのではないか」あるいは「既存のものをどう残していくかという観点の記載が多い」といったようなご意見をいただいています。

今後の進むべき方向としましては「将来的なビジョンを踏まえた企画や展開」あるいは「新規事業」の必要性、「未来を見据えた新しいプロジェクトをどのように作り出していくのか」「都市発展戦略や産業振興まで繋がっていくような挑戦的な政策の可能性について検討する必要がある」「プロデュース能力を持った人材を開

発しなければならない」といったようなご意見をいただいています。それらをまとめたものが上の太枠に囲ってあるように、都市戦略としての課題をまずは把握し、将来的なことを見据えた新規事業もしくはプロジェクト型などの事業の必要性に対するご意見です。これが、評価報告書の関係でいただいたご意見の一覧です。

資料の裏面に移ります。ここからは、アンケートに関していただいたご意見をまとめた内容になります。1つ目の方向性として、次期の文化振興基本計画における文化政策の方向性についていただいたご意見をまとめました。

審議会からいただいたご意見として「アンケートを現場の学芸員の方、あるいはクリエイターの方、インディペンデントの人たちに芸術活動や労働の観点で作る側からの意見としてとる」あるいは「女性目線とかソフトランディングができるような文化的資産や人物。ファッションとか飲食などデザイン的なブランド戦略のような視点を項目に入れていくといいのではないか」というようなジャンルに関するご意見と、「育児段階の親御さんとか、小学校低学年とか、幼稚園児、保育所児、そういった子どもたちに対してどのような供給実態になっているのか」など、アンケートの対象者に対するご意見などをいただきました。

これらのご意見をまとめたものが上の太枠に書いている通り「文化のジャンルについての幅を広げよう」「あらゆる世代にアンケートをして需要と供給のギャップを明らかにすべきだ」といったようなご意見です。

アンケート実施における留意点というところで文化振興審議会からいただいたご意見として、「アンケートに対する若者からのレスポンスが少ない。現状では、若者である10代20代30代がマイノリティになっているので、これらの世代の文化に関してもアプローチの仕方を非常に慎重にやらなければならない」というようなご意見をいただきました。太枠の中に書いている通り「若者に対する意見集約の方法を検討する必要がある」ということをご意見をいただいています。

次のページで、上の段に関しては、意識調査の基本的な考え方に関してご意見をいただいたものを表形式でまとめています。考え方としては、「アンケート自体は社会マーケティングと捉える」ということが書いてあります。「アンケートをするにしても、ヒアリングと両方セットでやるべきだ」ということと、アンケートに関しては行う側の考えがアンケートされる側に伝わるということで、「アンケート自

体がいわゆる広報になるのではないか」「アンケートをするにしても、何ら戦略もなしにアンケートしても意味がないのではないか」といったようなご意見をいただいています。

調査に関しては、「分野別の調査をする」ということと「文化の範囲すべてに関する供給実態としての調査」というところと「住民側の需要という意味での調査をすべきだ」とご意見をいただいています。

右側に移ります。対象者、対象分野、調査項目、目的などというふうに記載しておりますが、「ファッション・料理・お菓子のパティシエなどの存在がどれだけあるのか。そういったものを文化活動等と見なしてリサーチをすべきだ」「建築も入れるべきである」そして「どういう事業が要望されているかということと、芦屋が進むべき方向を導き出して求められている文化事業や文化政策は何かというようなことを聞くべきであろう」というふうにご意見をいただいています。

これらをまとめたものが太枠内です。「アンケートの無作為抽出による意識調査の方法とヒアリング、個別のヒアリングを実施すべきである」ということと、「ヒアリングをもとに、アンケートの内容を設計すべきだ」といったようなご意見をいただきました。

そして、個別ヒアリング実施の考え方につきましては続きの④に書いてあります通り、文化振興審議会の全般的なご意見としては、「まずは市民プロデューサー的な人材を発掘できるような調査を行うべきである」「分野に関しては衣食住、それと遊、その4つの分野に多くのもが含まれるのではないか」といただいています。

調査対象としては「ギャラリーとかライブハウスとかバーとかカフェとかそういったところにいろんな方が出入りしているので、そういうところに情報をとりに行く」「クリエイティブで独立して事業を行っている若い方あるいはそういう方がどれだけいるのかということを探すべきである」。

調査項目としては「次の5年間に芦屋でどういうことをすべきか、そういった方々に聞いてみてはどうか」「新しいタイプのプロデュースの仕方という観点をいれるべきではないか」。これらをまとめましたところ、「調査自体のそのものを次の事業に結びつけていくという視点をもって、アンケートを行うということと、分野別にヒアリングを行ってアンケートを設計するための基礎資料にすべきである」とご

意見をいただいております。

次のページです。⑤では、市民意識調査に関する考え方のご意見をまとめています。全般的なご意見としては先程の通り、「アンケートをとるという行為自体が、行政が何を考えているかということの広報」ということで、例えば調査項目でいきますと、◎の2つ目に書いてあります「アートプロジェクトに市民や学生がどの程度興味があるかという調査をすべきではないか」。2つ目に書いてあります、「市内のミュージアムに何回行きましたかということだけ聞くのではなく、阪神間という範囲でこれらの現場にどれだけ足を運んだかという聞き方をすべきである」ということで、例えば「地域別偏差を調べた方がいい」といったご意見をいただいています。

結果の活用方法としては「今のトレンドをどう吸い上げていくのか。」「芦屋市内のプラットホームで得ているサービスと阪神間で得ているサービスが見えると戦略も立てやすい。」といったご意見をいただいています。

そして、上の太枠の中でまとめている通り、「市民への発信の意味も含めて市民意識調査を実施してはどうか」というご意見もいただいています。

一枚目の資料に戻ります。これまでのことを市として検討した結果、意識調査そのものの方向性としては、芦屋の文化の概念を広げたいと思っています。そして、アンケートやヒアリングを行うことによって、次に繋がる人材や事業の発掘も念頭におきつつ、調査していこうと考えております。

意識調査の方法については、実施内容全体の流れと書いてありますが、意見をもとに、まずは個別ヒアリングを開始し、次に課題やヒントなどをそれらから抽出後、市民アンケートあるいは施設へのアンケート等を予定しています。

ヒアリングに関しまして、①にヒアリング対象者と書いてありますが、例えば若者ですと10代は県立芦屋高校の学生、20代は芦屋大学の学生を。芦屋大学の学生は試験的に1回実施し、そのことについては後ほど報告させていただきます。

子どもを持つ親の視点としては、芦屋市PTA連絡協議会を考えています。また、飲食・ファッション・メディア等で、事業者の方にもヒアリングを行いたいと考えています。これについては別途柴田委員と政策推進課の方で調整しています。

文化事業の実施者としては、本市の公民館の委託事業者である河内厚郎事務所に

お声をかけて、実際の現場の方にヒアリングできるか依頼しているところです。

他、例示としてですが、本市の震災20周年事業で、昨年、阪神淡路大震災20周年を機に、ルナ・ホールを使って事業を実施しましたが、その際に青空ドラマカンパニーという団体が朗読劇行っており、その後政策推進課と繋がりがありましたので、こちらにもお声をかける予定です。

ヒアリングの内容についてですが、別紙2を参照とあります。これがヒアリング調査の概要ということで、「文化のジャンルを広げること」と「需要と供給のギャップを明らかにする」という目的をもって、市内のファッションなどの文化事業者にはヒアリングを行おうと考えています。

調査対象者は市民とし、これについては芦屋市の文化のいいところで、資源や魅力、芦屋市の文化の不足または問題となっているところと、今後どんなことができるのかなど、市民と一緒に考えるという手法で実施する予定にしています。先程も申し上げました通り、芦屋高校の学生や、芦屋大学の学生などの子どもを持つ親を対象にヒアリングを実施しようと考えています。

事業者につきましては、柴田委員に調整していただいているところがございますので、どのような事業者になるかはまだこれからというところになりますが、同じく芦屋の人的資源発掘のための直接面談方式のヒアリングの実施を予定しています。

3に書いてあります、調査内容として、芦屋市の文化資源の現状と認識、次のページに他都市と比較して不足しているところ。あるいは芦屋市の地域特性を生かしてできるイベントや企画。これはあくまでも例示的ですが、こういったようなことをヒアリングで聞こうと考えています。

一通り今までの流れと、今後の動きに関して説明をさせていただきました。ポイントとして、市民アンケートは市内在住の市民に幅広く調査を実施するというのと、個別のヒアリングは個別に行っていこうと考えております。

**中川会長**：ありがとうございます。今までのところで、ご質問があればお願いします。先に他の資料もご説明されますか。

**御宿主査**：審議会でご意見をいただきたい内容も含まれていますので、説明いたします。

ヒアリング調査の概要として市民や事業者には芦屋の文化に関する個別のヒアリングを行っていくわけですが、資料1にイメージとして整理してあります。表の中の

イメージは実際のデータを抜粋しているところがありますが、あくまで例示とお考えください。

まずは、左端に平成26年度文化振興審議会意見書ということで、過去2年間にわたる文化振興審議会の委員の皆様のご意見をもとに、例示ですが街づくり、人、情報発信と言ったような切り口で課題としてピックアップしています。

中ほどにある各種既存アンケート結果は、文化振興審議会以外のアンケートの中で文化に関連しそうな事柄を抽出し、項目を整理しています。

続きまして実際に個別にヒアリングした結果をどう整理して行くかというところ です。街づくりであったり、人であったり、情報発信であったり得た情報をここで整理したいと思います。

右端に国や県や広域の動向・市の特性と書いてありますが、これはいわば国や県といったような全国的な流れとしての問題であるとか、社会的な問題、あるいは今現在、市で実施していることで充実していること、あるいは不足していることを整理しています。これらを踏まえまして、資料2-①の タイトルが芦屋市基本計画策定に向けた現状の問題と課題の整理をまとめますが、まだ議論の途中ですので、あくまでもこれをイメージとして捉えて、まずは強みとして、芦屋市がどういったような文化的資源、あるいは魅力があるのか。それらの「強み×機会」とし、例えば強みの欄では、潜在的な文化度の高い市民が多い。機会としては、地方創生などと書いてありますが、国が人口減少社会を見据えて国づくりを進めて行こうという施策を進めておりますので、そういったような機会を捉える。市内には潜在的に文化度の高い市民が多いので、これを機に何か活用できる機会を増やそうということです。

「強み×驚異」は人口減少社会などが該当しますが、それぞれ掛け合わせていて主要課題とします。これはあくまで現時点での例示です。

ここでも出てきました課題をもとに市民アンケートを行う予定です。実際のヒアリングの内容は市が課題抽出をした方がいいのかと考え、次のページに芦屋大学の学生5人を対象に個別に文化に関するヒアリングを行いました。

縦軸に関しては、下が芦屋市のこと、上が地域のこと、対象者5人が全員市民ではなくて市外在住でしたので、ご自身が住んでいる地域との比較を中心にヒアリン

グしました。そこで出てきた意見を環境や人関連として、横軸の整理をいたしました。

それらを踏まえ、今後、芦屋市の新たな文化事業の展開を5人に質問してみました。上から3つ目に「新たな展開の方法として行政と大学の連携によるイベントなどを開催」「芦屋川を生かしたイベントや環境教育」「ルナ・ホールを活用したパーティーやミュージカルの開催」「博物館を利用した漫画ミュージカルの開催」といった提案もあり、要するに若者として文化事業に接しやすい1つのきっかけがここに出ているのかと考えました。事業を展開する1つの場の考え方として空き家を利用した取組を記載しております。場の活用方法として既存の公共施設以外に空き家が全国的な問題になりつつあるので、空き家や空きスペースを活用するという視点を入れてはどうかと言った意見を学生よりいただきました。

このように個別にいただいたご意見を、右から二番目のヒアリング結果の欄に整理しています。それらを芦屋市の課題として、資料②の1に提示させていただいて、資料③で課題整理を行った後に、市民アンケートを実施していく流れです。

では、先程出た課題がどのように生かされるかは、(2)の1～4までに例示してあります。1では、「街を誇りに思い、愛着が感じられるよう、芦屋市に埋もれている文化資源を積極的に発掘し、情報発信していく仕組みが必要」という課題に対して、例えば、「芦屋市の地域資源とは何だと思えますか」「芦屋市の文化と言えば何を思い浮かべますか」「大切にしたい芦屋市の文化的な財産は何ですか」などの市民アンケートを行って行こうとこうと考えております。

本日特にご意見をいただきたいと考えているのは資料②-1「現状の課題認識」で、今後の調査で1番重要なポイントと考えておりますので、当然全委員に様々なご意見をいただけてきたところではあります。委員の皆様には、個人それぞれで事業者としてあるいは市民として、芦屋市の中のひとつのフィールドプレーヤーとして、且つ学識経験者の皆様には広く全般的な視点としての文化に関するご意見や、こういった課題があるのではないかというご意見をいただきたいと考えております。

アンケートに関する進め方と委員の皆様へのお願いを説明しました。以上です。

**中川会長**：はい、ありがとうございます。後段の説明についてご質問はありますか。では、全員にご発言いただきます。



藤野委員：前回の意見を基にしてここまで作り込まれたのはすごいと思います。まずは大きな方針として芦屋の文化の概念を広げるという取組がありますが、例えばパティシエや食文化の表現までこの審議会でも掌握できるのかどうか。調査すればその後の検証も含まれてしまい、産業振興まで含めて委員会の管轄にするとすると、結構な負担です。様々な分野に繋がっていくために情報発信という点ではいいのですが、ある程度で線引きをしないと、最終的な評価検証や進行管理まで責任がとりきれぬのかどうかです。

調査事業で尾道に3日くらい滞在しましたが、尾道は空き家再生プロジェクトで、全国的に有名になりつつあります。山沿いに空き家は何百軒もあり、そこにアラサーやアラフォーの人達が入り込んで、ゆるいネットワークができ、世界中からクリエイターが集まってきて再生プロジェクトに取り組んでいます。「旅人ホイホイ」と呼ばれ、尾道に旅で訪れて定住してしまったような人が100人程いて、ここで驚くのが最先端のアートの新しいお店などが始動する際にはまず市長が率先して応援団長の役割を買って出しています。市長がトップセールスの役割を担うことでそれが原動力となり、活動にプライドを持って生き生きと発信できる。行政が手厚い保護をし、お金はそんなに使っていないけれども、若い人たちが活気づき、自発的な新しいネットワークができています。

尾道にも少子高齢化や空き家問題があるけれども、全く新しい価値観の尾道スタイル、新しいライフスタイル、静かな革命が起きているということで、非常に驚きました。比較して芦屋という町はどういう特徴があるのかと言った場合に、尾道は中古車に自分たちで手を加え、すごい工夫で動かしながら楽しんでいる気がします。一方で芦屋はベンツやBMWに磨きをかけて楽しんでいる。地域特性が全然違いますが、そういうことが芦屋の重点施策になった方がいいのかどうか。つまり、深刻な社会問題というのは、芦屋の中で一体どこにあるのか。近隣に住んでいながら余り見えてこないのですが、全体的に水準が良すぎてしまうので、良すぎるがゆえに隠されていることがあるかもしれない。隠されている問題は、探り当てなければならないので、全体的な条件が良い中で、行政がどこまで手を出す必要があるのか。行政が手を出すのであれば、必要性をきちんと見定める必要があるという印象を持ちました。

**弘本委員**：実態を把握するためのアンケートで、他市との連携という部分を事務局が受けて整理して、芦屋大学の学生にも他市からの視点で聞き取りを行っていますが、実際には芸術に関する営みがどういうところで展開されているのか。実態を把握するという意味では、むしろお隣の西宮や神戸の文化的なスポットでも聞き取りをしてみるのもいいかもしれません。どんな人がいて、どんなマーケットが成り立っているのか。このアンケートに対してどんな意見を持つのか。

また、空き家は身近な問題ですが、芦屋で展開する時に芦屋ならではの魅力がどこにあるのか。比較的類似性のある地域では東京の世田谷も以前から住宅の活用に力を入れていて、行政の公的な機関が委託を受けて支援しています。2～30年間のまちづくりの実績があるからできている話ですが、昭和初期くらいに建てられた良質な住宅ストックを失くすことなく、守っていこうという意図を含んだ活動が展開されています。芦屋の中でするならば芦屋の資源として残すべきものは何かと言うことをきちんと評価をしたり、調査したりというようなことも市民参加で行う。クオリティーの高いものをクオリティー高く残して活用していくにはどうしたらいいのか。専門家にも助言をいただき、クオリティーの高さを評価し共有できる人同士が知恵を絞り合っていくような、他とは一線を画する質の高いものを打ち出していくというようなことがあってもいいのかと思います。

各地で「まちライブラリー」などの取組も沢山広がっていますが、全く同じスタイルのものが芦屋に馴染むかという点、違うような印象もします。資源として共有の価値観を持てる特性をアンケートやヒアリングで探っていく。先程、産業振興まで手を伸ばすと、広げすぎて難しいのではないかというお話がありましたが、産業振興ではなく、地域資源という形で取り上げ、地域資源をいかに活用していくかということを文化的な営みとして解釈していけば、文化振興審議会で取り扱えると思います。

**木ノ下委員**：資料をもとに前段のまとめがかなりまとまっているのですが、それをもとにした資料の別紙についての意見です。資料別紙2の調査内容の①の「芦屋市の文化資源の現状認識（強み）」で、次のページに書かれた項目が具体的に芸術文化と市民文化というジャンル分けされているのですが、棲み分けの仕方に違和感があります。どのような根拠で項目が立てられているのか。アンケートに落とし込んだ時にどう

いう結果が生まれてくるのか。見えづらいです。調査内容を整理して文化資源の現状の強みを導き出していますが、芸能文化・娯楽・生活文化・市民文化の棲み分けがばらついているので、このあたりの整理をきっちりしないと、何の意見を尋ねたいのかで、調査結果として活用する資料に障害が出てくると思います。同じく、「他都市と比較して芦屋市に不足しているところ（弱み）」で、この4項目は他都市にあっても、芦屋市には当てはまらないのではないかと皆さんが考えているのであれば、「こういうことはどのような地域で体験していらっしゃいますか」「具体的な場所を示してください」というような聞き方にした方が効果的ではないかと思えます。

また、資料①と②で、芦屋大学の人たちの意見をそのまま受ける必要はないと思います。むしろ、資料①で、「平成26年度の都市の施設や県の施設などの利用を前提とする」とすでに言っていますので、先程の意見と結びつけて、具体的に近隣にどういふところがあるのか、具体的に想定してみる方が、ここの連携と資料整理のイメージと繋がって、アンケート項目にも繋がると思います。

また、その下で「団体や個人の文化活動に対する支援として様々な連携を意識する」と書かれているものの、そのような項目立てができていないのではないのでしょうか。例えば市における団体、あるいは企業というものがどういったところにあるのかの絞り込みや、洗い出しが必要ではないのでしょうか。特質した芦屋市の課題というものが絶対あるはずで、それが何なのか。芦屋ブランドと言われている国際住宅都市としてのあり方。生活感としての文化をどう捉えられるのか。余所から人が来るようなことを芦屋市民の方々は望んでいるのですか。大都市の場合は他都市から人が来ることによって活性化されますが、芦屋市において果たして余所から空き家対策でいろんな人が来ることを望んでおられるのでしょうか。つまり、生活文化を盛り込んだ芦屋文化に対してのヒアリングが必要なのかと思えます。

あとは情報発信でなくても、どこから情報を取ってくるのか、具体的な情報ツールの項目を設けてもいいのかなと思いました。

**柴田委員：**まず、アンケートの結果を見ると、芦屋の住民の意見ではないなという感想を持ちます。芦屋大学は芦屋にあるものの芦屋在住の学生はものすごく少ないはずで、芦屋在住の学生はどちらかというと、市外に通学していて、私学であれば甲南大学

の方が芦屋在住の学生が多いのでは。芦屋大学の学生が対象ということに対して疑問を感じます。市外在住者・学生中心のサンプリングで出ている言葉だからと思いますが、「高級住宅都市」とか具体性があまりにも少なく、意見としては薄い印象です。強みが漠然としていて答えにくいのであれば、もう少し参考になる答えの出やすい質問に置き換えるべきですし、回答も芦屋市独自の文化に対する情報がすごく少なく、どこの都市にもあるようなことしか書かれていません。私もヒアリング対象者をお探しする作業を行っています。現在対象者は芦屋で商売をされている方、なおかつ、芦屋に長く住まわれている方に絞っていますが、その人たちにも質問を間違えるとこれに近い意見や内容になってしまう可能性があります。つまり、ある程度誘導してあげることも大事なのではないかと思います。

**中村委員**：概念がかなり広がっているので概念の制限を設ける必要があるのではないかなということをおっしゃっていたかと思いますが、スポーツにもスポーツ文化というのがありまして、前はスポーツという言葉が出てこなかったのも、ここからは外してしまうのか。仕事柄団体で活動されているところが非常に多いという印象で、芦屋市の場合は、社会教育登録団体が約350団体あります。10人以上で活動するという事で限定されていますが、大きな力になっています。「知の循環」を目指して、社会教育活動として登録していただくと、使う施設の3割免除という助成もあり、そういったところでも支援しています。では、どのように展開をしようという、職員では出前講座、また市民の方にもそれぞれ出前講座のようなものをしてもらえないかと思っています。実際には若い方たちで活動していくのは厳しく、高齢者の方でも活動しながら自分たちだけではなく、活動をどう生かしていくのか。そういう視点も踏まえて、実際にはどういう活動をしてくださるのか。どういうところに貢献していただけるのか。毎年調書も取っているんで芦屋市の文化を広げる意味合いでもそういう観点がとり入れられるといいと思います。

**中川会長**：スポーツに関しては、含めないということで議論したはずですが。

**御宿主査**：スポーツは別の計画がありますので含めません。

**姉川委員**：芦屋大学の方のヒアリングですが、芦屋に大学が沢山あるわけではないのでせっかくです。芦屋市内在住の学生を対象に聞きとりをするというのは新しい手がかかりで、若い人の意見として意味があるような気がします。文化振興がテーマですが、

一般的な芸術文化は絵画・彫刻・建築・演劇ですが、連携をとることによって、何か新しい広がりが出てくる。そういう可能性があると思います。今の美術博物館とルナ・ホールは行き詰まっている。それを新しいものを作っていくための1つの手がかりとして、西宮なり尼崎なり神戸なりと連携をとって、アンケートでどう効果があるのかはわかりませんが、少なくとも切り開いていくための手がかりが出てくると思います。もう1つ、芦屋川は芦屋市民の自慢です。利用価値は自然という意味が1つですが、それ以外に文化的な利用価値があるはずで、芦屋市民であれば芦屋川で幼児のときに遊んだ記憶があるはずで、芦屋川を使って文化的な切り口ができていくような気がします。そうした面では、空き家も文化振興的に大きな意味があると思います。社会的な意味と文化的な意味の両面をうまく活用することによって意味があると思いますので、空き家もひとつのテーマとして考えていきたいと考えます。

**田中委員：**資料②-1ですけども、この切り口はとてもわかりやすくいいと思います。弱みのところで、「地域の行事に参加したいという子どもの回答が少ない」とありますが、ヒアリング対象が高校生と大学生だったのでこういう回答が出てきたのではないですか。各小学校にコミスク行事が沢山ありますが、とてもにぎわっています。子どもたちの参加がとても多くて本当に楽しんでいる様子です。ただ、この回答から中学生や高校生が参加する場所が芦屋に少ないことが課題だと改めて気づきました。さらに、もう少しヒアリングするのであれば、芦屋市に住んでいる外国人に対して聞き取り調査をすると何か面白い回答が出てくるのではないかと思います。

**山西委員：**芦屋にはいろんなものがありますが、それが情報として伝わっていないのかなという感じがしています。芦屋大学の学生の回答からも読み取れますが、魅力がなかなか伝わっていない。芦屋市を住みやすい街と考えると、障害者目線であるとか、多文化共生というところで外国人の意見も大切だと思います。西宮市や神戸市は、雑誌などで情報発信されていますが、芦屋は情報が非常に少ない。ただし、インターネットなどで閲覧すると芦屋の情報は大変多いところを見ると、芦屋市民は内心、情報を出したくない。知る人ぞ知るということで、小さなコミュニティが沢山あり、楽しまれているように感じています。エリアごとの個性はあると思いますので、地域振興や産業振興にもはめ込んでいけるのかなと思うので、アンケートの取り方を

工夫できるといいと思います。また、市外からの来訪者として芦屋マリーナや芦屋ゴルフクラブなどのエグゼクティブからアンケートを求めても面白いものが出てくるとは思います。

**根本委員：**振興基本計画とアンケートの関係ということで、前回の審議会のやりとりも丁寧に編集していただけたと思いますし、そういう意味ではどういった振興計画になっていくのか。阪神間は全国的にみても大都市圏を形成しています。田んぼの真ん中にぽつんと都市があるわけではなくて阪神間という大きなメガポリスの中の都市という認識がアンケートにも反映された聞き方になっていると思います。おそらく芦屋大学に限らず、阪神間の大学に通学している学生は、居住地という意識はないでしょう。他県から来ている学生は住民票も移していないと思います。

大学に通うために住んでいるのであって、芦屋市や西宮市の住民になろうと思っているわけではないので、フェイスシートやヒアリングで住民票を置いていますかと質問してみてください。学生に限らず、流入と流出の割合も気になります。文化からは外れるかもしれませんが、人口の流出が著しいとすれば理由は何か。流入に関しては、何を求めて転入したのか。地域の文化資源や住みやすさなどの何を評価したのか。まずそこです。文化の力を上げていくのが文化振興計画の目的ですが、「文化の力を」というのと「文化の力で」というのでは両極端であると思います。「文化の力を」上げていくのであれば、市の文化施設で、どれだけのクリエイティブな活動が新しく作られていくのかということもありましょうし、「文化の力で」というと何が魅力で、芦屋の住人になろうと思っているのか。つまり芦屋市の文化振興計画は「文化の力を」上げて行きたいのか、あるいは「文化の力で」課題を解決して行きたいのか、目標がわかるアンケートにした方がいいと思います。私の芦屋市の第一印象ですが、ある年齢から上の方々の知的レベルが異様に高い。浜松や世田谷で社会人クラスをやっても団塊の世代以上は中卒か高卒が一般的です。1960年代の大学の進学率は10%を切っていて、国民の数%しか大学にいなかった時代に大学にいていた人がこの阪神間に集中している。非常に特異なデモグラフィックな特色を持っていると思います。SWOT分析で弱みは何かと上げていますが、かつて日本の大卒が集中していた高学歴都市が普通の市になったのはなぜか。それはもしかしたら、ものすごい弱みかもしれない。誰もが文化に触れる機会や権利が

あって、当たり前サービスされる。普通の市になったのが良いか悪いかは別としてとして、少なくとも大正から昭和にかけては、日本の特別なアドバンテージがあった歴史がある。その復権をもう一度果たすそうという方針にするのか、普通の市にするのか。どちらに転ぶにしてもモダン都市としての文化と伝統は失ってはいけないと思います。これをどういうふうに生かしていくのかをアンケートで市民に問いかけたらと思います。どの年齢階層に聞くかによって聞き方も違えなければならぬですが。最後に、SWOT分析をされて、昨今の状況であれば、財政状況も厳しいし、あれもこれもやるというわけにはいかないの、撤退を考える必要がある。むしろ近隣の市にアドバンテージがあるのであれば、敢えて芦屋は頑張らなくてもいい。先程から言っているように広域の都市計画を利用すればいいので、撤退戦略もここであぶり出さなければいけないのかと思います。

**中川会長：**計画そのものの役割として、全体の全容の把握と、今後の進行管理ができる計画にすることを明示して欲しいと言うことですね。計画を作る基本コンセプトとして、いろんな考え方があるけれども、本当のところ行政はどんな芦屋にしたいのか。住民が肌で感じる意向と市長の意見とか、議会に出ている意見を把握してリーダーシップを握って意見をぶつけていけるようなリーディングコンセプトはあるのですか。もしないのであれば、逆に、深刻に抱えている弱点、社会問題であるとか、そういうところからスタートするのも一つの方法ではないかというところですよ。

沢山の方から指摘があったのは、芦屋単独の計画にすべきで、近隣との棲み分けというか、会社で言うところのマーケティング。撤退すべき施設などのマーケティングやリサーチをした方がいいとは思っています。芦屋市内の活動団体などをきちんと把握しておくことも大切。生活に文化、市民が主役となる文化活動というのは、非常に重要な課題ですので、芦屋川カレッジもそうだろうし、社会教育団体がやっている知の循環もそうだろうし、教えられた人は教える人になるという運動でもあるので、そのような実態を把握しておいた方がいいのではないかとはいいます。

ヒアリング対象としては、市内在住の大学生から聴取したら、いいのではないですか。任意に訪問するわけにはいかないし。とはいえ、芦屋大学から出てきたデータが政策的にインパクトがあるのかという疑問がある。同じヒアリングをするにしても、在住外国人もいいし。資料では小学生とか、乳幼児とか子育て中のお母様方

とかそのあたりの世代が全く抜けていて、高校生と中学生の意見でまとめるのは、早計ではないかというご意見でした。これは根本的な問題ですが、文化振興基本計画とアンケートの関係。文化振興計画は、どんな計画を目指すのか、それによってアンケートが変わってくるので、こういう街にしたいという理念を明確にする。こんな弱みがあって、克服しなければならない。それを何とかするための行動計画であるというものであれば、それに対応したアンケートになるはずですが。多分一般的なアンケートはやめようということだと思います。あなたは、1年間に何回文化活動しましたかと言うような愚問ではなく、もっとシャープにターゲティングしながら説明を考えていくということが大事だということをおっしゃったと思います。メガポリスという意見は近隣との連携という意見と意見が重なっていて、補完関係や競合関係をマーケティング的に示さないと位置が見えないです。

私個人の質問としては、資料1で「国際文化住宅都市としての総合的な文化戦略の構築と推進」というのに二重カッコがしてあります。出典先はどこですか。

**御宿主査：**これは以前の文化振興審議会での会長の発言です。こういうようなことを次の計画では、考えるべきであろうということで、機会としては、芦屋市が、国際住宅文化都市として個別法を持っている都市という捉え方です。

**中川会長：**資料の①は各種統計や資料からの整理とありますが、各種アンケート結果やヒアリングからの分析統計は、何も使っていないですよ。総合計画にはどのように謳われているのですか。

**奥村課長：**今まだ総合計画は策定中で、市民に対してパブリックコメントをいただいている段階です。先程の「文化を」と「文化で」のお話があったと思いますが、総合計画では文化で魅力を発信するという位置付けの目標を入れようとしております。

**中川会長：**総合計画を策定するにあたっては、総合計画審議会と無関係に作っていますということがないようにお願いします。

**奥村課長：**どのタイミングになるのかはわかりませんが、総合計画の内容はこちらでも報告させていただきます。

**中川会長：**芸術文化と市民文化のかっこ書きの内容の区別がつきにくいです。

**奥村課長：**プロで活動している営利と非営利で分類してあります。

**中川会長：**資料2のグラフ②これについては、どこで体験しているかという意見があったと



思います。

**奥村課長**：大阪や京都や神戸を念頭に置いています。

**中川会長**：先日、事務局と協議した内容を伝えますと、テレビ、CDやビデオで観賞したことを活動内容に含めることのないよう、それを含めると1年間のほとんどを芸術活動に費やしていたこととなります。今出ている意見について事務局から何かありますか。

**奥村課長**：どういうコンセプトで進めるかということが1番重要と考えます。昔は非常にアドバンテージがありました。確かにそうだと思いますが、昔ほどアドバンテージがないもののまだまだ市内には優れた人材が多く、それをいかにピックアップできるのか。その情報をどのように事業に繋げていくのか、芦屋市を誇りに思う率直な意見はどのようにすれば、聞き出すことができるのかが課題と考えています。

**中川会長**：アンケートではなくてヒアリングの方がいいかもしれません。

**奥村課長**：ヒアリングはアンケートの設問を設定するために行いますが、その中でも問題を引き出すためにどのような角度で質問すればいいのか。芦屋大学に試験的にヒアリングを行ったのは、居住地と芦屋の差異が聞きたかったためで、今後の対象者は幼稚園や小学校のPTAと市内の事業者を候補にあげています。

**中川会長**：芦屋ルネサンス事業の折の委員は芦屋在住で非常にグレードの高い委員ばかりでしたので、個別ヒアリングを行ってはいかがですか。

**奥村課長**：河内厚郎事務所よりお名前が挙がっていますので、受けてくださるようであれば、学識経験者も含めて考えています。また、市外の事業者にもお話を聞けたらと思っています。

**中川会長**：あと、少し残っていますので、発言がありましたら、お願いします。

**姉川委員**：ヒアリング対象者に河内さんの事務所と青空カンパニーがありますが、美術博物館系は調整中ですか。

**奥村課長**：美術博物館は27年度のフローでは3つ目に該当し、課題抽出後のアンケート対象者になります。

**中川会長**：追加で発言されたい方どうぞ。

**藤野委員**：ヒアリング対象者に芦屋出身の文化人も加えるべきです。アーティスト、メディアに露出されている方、クリエイター、起業家あるいは学者のパーセンテージが高

と思います。芦屋は日本の中でも、ヨーロッパ型の近代主義社会に一番最初に接触した地域だと思うので、芦屋出身の文化人がどういうアイデンティティを持っているのか。特異性とかオリジナリティをまず確認することは重要で、転出されたことで芦屋の強みを一層再認識されているはずです。

根本委員がおっしゃったことが非常にクリアに受け止めやすかったと思いますが、芦屋の文化は一体何を目指しているのか。エリートが多いという捉え方をするのか、それとも時代は変わり、もっと新しい価値を模索するのか。そのあたりが重要な岐路になっていくのではないかと思います。

**中村委員：**若者では成人式の実行チーム、また、幼児を持つ子育て世代としては、市民団体として登録されている子育てサークルに行ってみてはどうですか。芦屋は転勤による転入が多いため、率直な意見が聞けると思います。

**木ノ下委員：**博物館や美術博物館は施設アンケートの対象のようですが、ブランド戦略なりこの基本計画に基づいて必要な課題は何なのかといった前提を明らかにした上で個別ヒアリングをすれば、一般市民より質問意図がわかるので、むしろ的確な材料が拾えるような気がします。阪神間モダニズムと新しい転勤族が二極化している中で、芦屋がどう展開しているのか、肌身として感じているはずなので、解決に導く意見が聞けるのではないですか。

**中川会長：**こういうことは不動産屋が専門です。流入、流出、地価、ブランド力など、住民は何を文化として捉えているのか。全国的にも現状、芦屋ブランドはどう捉えられているのか。

流出時や流入の分析について副会長からご指摘ありましたが、役所の政策としては実施していないでしょう。

**奥村課長：**転入と転出の状況は数で拾えます。

**中川会長：**「データはこうですが、どう思われますか」と具体的に不動産屋さんに質問してもいいのではないですか。そのまま回答として使えばいい。ところでどんなデータですか。

**奥村課長：**転出転入の数です。

**中川会長：**転出の理由を尋ねたデータですか。

**奥村課長：**転出転入時の理由はデータに含まれていません。

中川会長：理由が基本計画の分析に大切だとおっしゃっています。では行政としてはデータを持っていませんね。

奥村課長：そうです。

中川会長：では、そのあたりをうまく聞くコツは、不動産屋に率直なケーススタディーを尋ねれば率直な答えが返ってくるはずですから、そのまま書いておけばいいわけです。転出届の際に窓口で理由を尋ねることはできませんか。

奥村課長：それはできません。

柴田委員：転入された方に理由を聞くことができればそれにこしたことはありませんが、「あなたにとっての他の市にはない芦屋の文化とは」といった飾らない質問での確な答えを抽出できるのではないですか。芦屋が高級住宅街として全国に知れ渡っていることは最大のメリットです。それに付随する歴史的な裏付けをうまく使っていただければいいのではないですか。私は他市出身で、芦屋の持つ特異な空気に憧れを感じていましたが、代表格である谷崎潤一郎記念館を訪れたとき私が当時期待していた『芦屋』らしい個性がなく拍子抜けしてしまいました。これこそ芦屋ならではの感じているものをアンケートで回答してもらえよう、質問項目の中に上手く取り込むべきです。

中川会長：芦屋ならではのものを設問の中に入れて欲しいということですね。

姉川委員：ヒアリング結果からは芦屋川の景観を支持する意見が多いと思いますが、芦屋川のディテールは非常に病んでいることを理解していただきたい。一見緑が多くて美しいように感じますが、河川敷に繁茂しているツルヨシは生物の多様性等の面から大きな課題を抱えています。そこを念頭に置きながら、ヒアリングの内容を検討してください。

中川会長：環境問題の議論になりますので、むしろ芦屋川を文化計画の中に取り込むかどうかを採決しなければなりません。川をこの基本計画の中に取り込むということはどのぐらい可能なのでしょうか。産業には踏み込まない、地域文化で捉えた方がいいという意見がありましたが、芦屋川を文化委員会で取り上げるというのは、私としてはかなりハードルが高いと思います。

姉川委員：ただ、芦屋川は文化財に指定されています。芦屋市が川を文化財に指定したわけですが、そこには誤解があるので、事実を認識した上で文化財としてこれからどう

していけばいいかということをごできるだけ考えていただきたいということです。

**中川会長**：だから、その芦屋川をこの基本計画の中に入れるという判断は私にはできません。

それぐらい大きな問題なんです。

**米原部長**：スポーツと同じではないですか。ここで含めてしまうと、限りなく拡大してしま

うので。海岸線の自然もということにもなりかねない。文化といっても、私的な景観や自然環境は文化には含めない。文化財は文化財で、委員会がありますよね。

**藤野委員**：はい、保護自然委員会があります。

**中村委員**：しかし、文化財として自然景観を入れているわけです。

**藤野委員**：ここでの文化の範疇はカテゴリー分けが難しい。環境文化などと何でも文化がつかますから。

**中川会長**：文化財の活用ぐらいは我々も踏み込めますが、そういう意味で芦屋川をどう活用するのかがぐらいに触れることはできると思いますが、改修工事となると、文化委員会の範疇ではありません。我々も行政の仕組みをうまく使いこなさないとい

**藤野委員**：ヒアリングの時に芦屋川はこういう病を抱えているということをご予備知識として出すぐらいはいいと思います。それに対する対策はここでは難しい。

**米原部長**：限られた中でのヒアリングになると思いますので、聞き方は工夫する必要があると思います。

**中川会長**：それでは、一旦ここで打ち切ります。今日いただいたご意見は貴重なものがたくさんあります。ありがとうございました。次回開催日程等の報告をお願いします。

**奥村課長**：次回は平成27年12月22日です。本日いただいたご意見を踏まえまして、ヒアリングを秋ごろに実施したいと思います。年明けのアンケートの実施に向けて、次回ご報告したいと考えております。

**中川会長**：これをごもちまして本日の審議会を終わらせていただきます。ありがとうございました。